一八七三（明治六）年二月、政府はアメリカ人ブライアン（S. M. Bryan）を駅逓寮に雇い入れ、まずアメリカとの間の郵便条約の交渉に当たらせた。こうして同年八月六日に調印されたのが、日米郵便交換条約である。

条約によって日米の間の郵便は、一八七五（明治八）年一月一日から開かれることになる。その料金は、書状一通、半オンス（約十六グラム）までごとに日本は十五銭、アメリカは十五セント、と規定された。ただし実施してから一年後には十二銭（十二セント）となる。

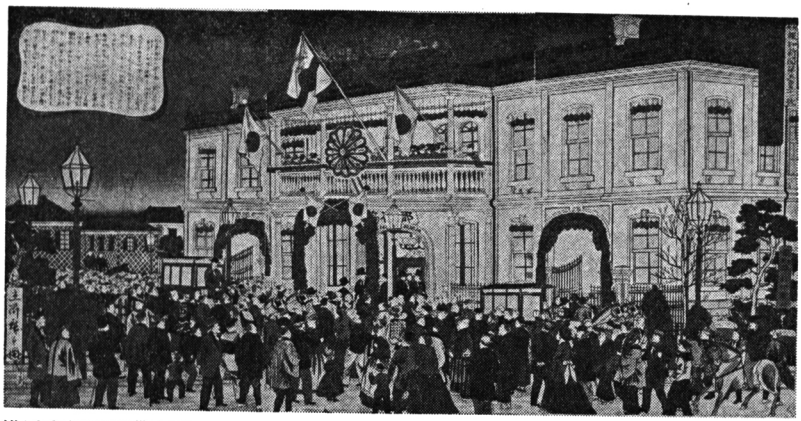
日米条約の成立につづいて、政府はブライアンをヨーロッパに派遣し、イギリスおよびフランスとの交渉に当たらせた。しかし両国とも、日本の申し入れには応じない。日本における郵便制度、とくに外国郵便の制度が整備されていない、というのが、主たる拒否の理由であった。たしかに当時の日本においては、外国郵便の事務に通じた者は、ほとんどいなかったのである。ブライアンは再びアメリカに渡り、日本の外国郵便局に雇い入れる書記官の人選や、器材の購入に当たった。国内においては、横浜をはじめ、神戸と長崎に郵便局を新設するための準備を進めた。

横浜郵便局は、本町一丁目の税関付属地に、県庁に面して建てられた。着工は一八七六（明治九）年十月である。煉瓦造、二階建ての堂々たる建築であって、内国および外国郵便のための設備を整えている。ブライアンほか、数名のお雇い外国人も常駐して、外国郵便に関する主要な業務は、ここで処理されることとされた。

日米の間の郵便交換条約も、一八七五（明治八）から施行されることが決定された。アメリカの在日郵便局は、一八七四（明治七）年十二月三十一日をもって廃止される。外国郵便の開業にそなえて、新しい郵便切手（鳥切手）三種も、一八七五（明治八）年一月一日付をもって発行の運びとなった。

外国郵便の開業は、一八七五（明治八）年一月一日である。横浜郵便局においては、同日から事務を開始したと記録されて

©神奈川県立公文書館



横浜郵便局開業之図（三代広重画）　神奈川県立博物館蔵

いるが、新年のことであり、実際に何日から執務が始められたか、明らかでない。

横浜郵便局において、外国郵便の開業式が盛大に挙行されたのは、一八七五年一月五日であった。この日、局舎の中央には国旗と郵便旗を高く掲げ、前面には瓦斯燈をめぐらせて、とくに正面玄関の楼上には、大きく菊花を模した瓦斯燈を点じた。夕刻に至って、昼をあざむく燈光のもとに、東京から内外の貴賓が、つぎつぎに馬車で到達する。式典および祝宴は午後六時過ぎから始められ、九時半過ぎまでつづけられた。

こうして外国郵便は開業されたが、実際に横浜から外国むけに郵便物が差し立てられたのは、一月八日であった。この日に、この年の第一船が横浜を出帆したので、すでに受付けられた郵便物には、当日の日付印を押して積み立てたものと考えられる。横浜には、また一つ、海外にむけた大きな窓が開かれた。

その後、一八七七（明治十）年六月一日、わが国は万国郵便連合（UPU）に加盟し、ひろく世界各国と郵便交換の道を開く。イギリス・フランス両国にも、郵便局撤去の交渉をつづけた結果、イギリス郵便局は明治十二年末までに撤去した。フランス郵便局も一八八〇年三月三十一日には閉鎖され、ここにわが国の郵便主権は完全に回復されたのであった。

©神奈川県立公文書館

第二節　キリスト教の移入

一　禁教下における宣教師の活動

宣教師の渡来

横浜は、日本のプロテスタントにとって、横浜バンドとよばれ、熊本・札幌・静岡とならんで、初代の指導者を生みだした所であり、キリスト教界にあって重要な意義をもっている。プロテスタントの宣教師が、日本にはじめて赴任してきた安政六年（一八五九）以来、一八七三（明治六）年二月二十四日のキリシタン禁止の制札撤去の日までに来日した宣教師とその夫人たちは、およそ六十名に及んでいる。その初めの宣教師たちは、中国伝道の経験をもっており、また漢文に翻訳された聖書を使用したように、中国伝道のわが日本伝道に与えた影響は大きかった。その中国伝道は、一八〇七年に中国に赴任したロバート・モリソンによって始められたといわれている。

また、インド、中国へのプロテスタント伝道は、超教派的な運動として展開され、その代表的な例として、ロンドン伝道協会（一七九五年創立）と、アメリカ伝道協会（一八一〇年創立）とがあげられる。モリソンは前者の所属であった。この東洋伝道における超教派的伝統は、日本での初代教会の形成に強く影響している。

わが国の歴史上、はじめてプロテスタント教会が創立されたのは、まだ禁教下の明治五年二月二日（一八七二年三月十日）

©神奈川県立公文書館

のことであった。場所は横浜の居留地で、日本基督公会（横浜公会）がそれである。次にその創立の由来を、J・C・ヘボン、S・R・ブラウン、ジェイムス・バラの活動をたどることによって明らかにしたい。

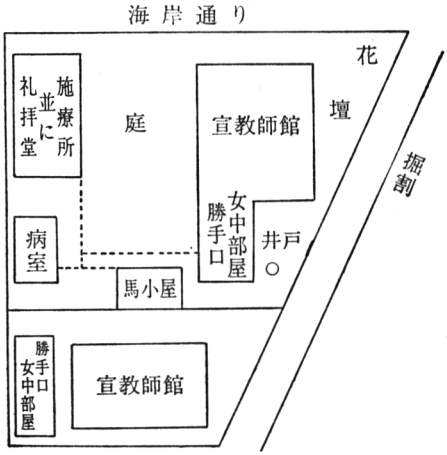
安政六年（一八五九）の秋、旧暦九月から十月（陽暦では十月から十一月）の間に、長老教会のJ・C・ヘボン、改革教会のS・R・ブラウン、D・B・シモンズが神奈川に、改革教会のG・H・フルベッキが長崎に来ている。ブラウンとヘボンとは、日本赴任当時は米国に帰っていたが中国において宣教師としての経験をもっていたのであり、ともに、米国から直接に日本宣教のために来日した。

ヘボンの活動

ヘボンの所属する米国長老教会の外国伝道局は、東洋では主として、中国、シャム、インドにおいて活動していたが、とくに宣教医師による活動で注目される。医療伝道は、アジア各地における期待にこたえるものであったといえるが、アジアの一国である日本の場合にも、医師ヘボンが派遣されたのである。また、同派の中国宣教師が翻訳または著作していた中国語のキリスト教書出版は、日本伝道に大きな力となったことは周知のことである。幕末、わが国に持ちこまれていた中国語キリスト教書は、百種類をこえていたが、その半分近くは、長老教会宣教師の手になるものであった。

ヘボンは、日本への宣教師を志願したとき、ニューヨークで病院を開業して成功を収めていたのであり、親族、知人の反対にもかかわらず、夫妻で来日したほどに、日本伝道に熱意をもやしていた。ニューヨークから横浜への船中で、すでに日本語の学習につとめている。そして、滞日中に『和英語林集成』（慶応三年印刷完了）を著した。これは、聖書和訳に重要な役割を果たしたが、いわゆるヘボン式ローマ字は、この編纂にあたって考案したものである。そのほか、伝道用小冊子や聖書の和訳に尽力した。明治五年（一八七二）、米国聖書協会から、ヘボン訳ヨハネ伝のローマ字版（英文対照）が刊行された。聖書翻訳

©神奈川県立公文書館



居留地39番のヘボン邸見取図
高谷道男『ヘボン書簡集』から

については、明治三年（一八七〇）から改革教会のS・R・ブラウンと共同し、一八七四（明治七）年以降は、ブラウンが新約聖書翻訳委員長となって、ヘボンはその一員として協力した。この訳は、一八八〇（明治十三）年に完成したが、一八八二（明治十五）年以降、ヘボンは旧約聖書翻訳委員会の委員長となり、一八八七（明治二十）年末、その翻訳は完成した。

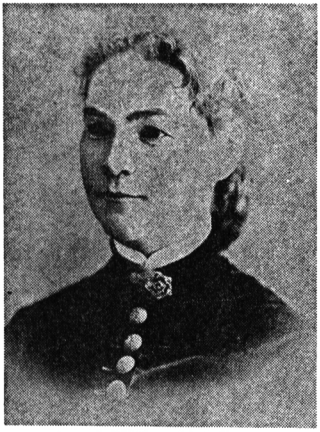
ヘボンを日本人に親しませたことは、何といっても、その医療奉仕の活動であった。彼は、文久元年（一八六一）春、神奈川の宗興寺で、施療所兼病院を開いた。眼科医であったのに、外科手術や内科の治療まで担当しなければならなかった。あまり沢山の日本人患者が集まったため、五か月ばかりで、幕吏により閉鎖を命じられた。それでも患者は、ヘボンの住む成仏寺にたずねていった。彼は、往診にもいった。とくに文久二年（一八六二）夏に、コレラが流行したときは大変であった。同年暮、横浜居留地三十九番館に、新しく施療所を設け、改めて医療活動を始めた。今度は、居留地内であったから、幕吏の干渉をうけることはなく、患者は増加するばかりであった。俳優の三代目沢村田之助の脱疽（だつそ）を手術し義足を作ったことが「もしほ草」や「日要」などのジャーナリズムにとりあげられ、ヘボンの名は、いよいよ有名になった。しかし、健康上の理由から一八七九（明治十二）年で医療は廃止した。その幕末以来十八年間に施療した患者は、六千人から一万人に及んだという。それと同時に彼は、禁制下の時期に、これらの患者に伝道用の冊子を配布していた。

ヘボン塾といわれるものは、ヘボン夫人が三十九番館の施療所において、日本人のための英語教授をはじめたもので、日本

©神奈川県立公文書館

で最初のキリスト教学校教育ということができる。その開塾の直接の動機は、ヘボン夫人が、医師林洞海から、その養子桃三郎のために英語の教授を依頼されたことにある。この桃三郎はのち、林董（ただす）として英国大使・外務大臣として活躍した人物である。林と同時期の塾生に、林の実兄佐藤桃太郎や、高橋是清、益田孝など、後年に政界・財界の指導者になった人物があり、佐賀藩派遣の青年やヘボン門下の医学生も、夫人から英語を学んでいた。ヘボン夫妻が上海にいったとき、一時閉鎖されたが、横浜に帰ってくるとともに再開され、いよいよ盛んになって、明治二年（一八六九）ころには女子クラスも設けられた。明治三年八月（一八七〇年九月）、改革教会の婦人宣教師メアリー・キダーがブラウンの紹介で塾の教師に就任した。（高谷道男『S・R・ブラウン書簡集』による）キダーは山手二百十一番のブラウンの家に同居してヘボン塾に通勤していた。

明治四年（一八七一）から五年にかけて、ヘボン夫妻が上海にいっている間に、キダーがその留守に教えていたが、このとき男子生と女子生とが区別され、キダーは、女生徒だけを教えていた。ヘボン夫妻が帰ってくると、キダーは、明治五年（一八七二年七月）神奈川県県令大江卓の斡旋で、野毛山の官舎の一部を借り、そこで独自の女子教育をおこなうようになった。これが、のち、フェリス・セミナー、現在のフェリス女学院へと発展してゆく。



フエリス女学院の創立者ミス・キダー女史
『フエリス女学院六十年史』から

ヘボン夫妻は、明治五年秋（一八七二年十月）ヨーロッパ経由で米国に帰り、一八七三年十一月三十日横浜にもどってきた。この間に、キリシタン禁制の制札は撤去されていた。この留守中のヘボン塾は、長老教会宣教師ヘンリー・ルーミスらによって支えられていたのであろう。一八七三（明治六）年末からは、宣教師ルーミスが加わり、教会教育としての安息日学校（日曜学校）がさかんになった。ヘボン塾生のなかから、そのバイブル・クラスに参加するも

©神奈川県立公文書館

のもふえた。一八七四年（明治七）七月五日に、ルーミスが洗礼を授けた日本人十名のうち、八名までが、ヘボン塾の生徒であった。

ブラウンの活動

ブラウンは、米国・オランダ改革派教会に所属していた。同派は米国においてはプロテスタント教会の一小教派にすぎず、独自の外国伝道局をもったのは安政四年（一八五七）であった。しかし日本伝道に熱意を示し、安政六年（一八五九）に、三人の宣教師を派遣してきた。同派の日本伝道の拠点は、神奈川（のち横浜）と長崎で、ブラウンは神奈川で、フルベッキは長崎で活動した。宣教医D・B・シモンズは、横浜で医療に従事した。

ブラウンは、安政六年十月七日（一八五九年十一月一日）シモンズと共に神奈川に到着した。ブラウンは旧知のヘボンが住む成仏寺にはいった。翌万延元年（一八六〇）には、江戸で日本語教師として矢野隆山（元隆）を雇った。「一刀を身につけている日本の医師で、四十六歳です」とブラウンは記している。（『S・R・ブラウン書簡集』）文久二年（一八六二）十月、神奈川奉行は、横浜運上所の官舎で、通訳養成のため、英学所を開校した。ブラウンは、そこの教師に任命された。

この年、矢野隆山が死亡したが、慶応元年九月十七日（一八六五年十一月五日）、彼は病床にあって、家族の面前で、家族一同の承認のもとに、バラより洗礼をうけたのである。日本最初のプロテスタント信者である。

ブラウンは、このように希望が見えてきた段階においても、なお伝道について慎重であった。宣教師は説教の罪は問われないけれど、その聴問者の日本人は罪に問われるからである。彼は、キリスト教国の政府が、日本の支配者に対して、キリシタン禁制の撤廃を要求するよう訴えている。どこまでも合法的に伝道しようとしていたのである。

ブラウンは、慶応三年（一八六七）米国に帰ったが、二年後に、明治新政府の招きに応じ、新潟の男子の英学校を管理する教師として、再度来日した。このとき、伝道協会は、日本へ最初の未婚婦人宣教師を派遣することを決定し、ミス・キダー

©神奈川県立公文書館

（M・E・キダー）が、ブラウン夫妻に同行することを命じられた。

ブラウンは、明治二年（一八六九）十月から翌年六月末まで新潟にいたが、日曜日に自宅で聖書を教えたことが原因で再び横浜にもどった。横浜では、修文館の校長格の教師に就任した。この修文館は、幕府が、役人の子弟に漢学を教えるために、慶応二年（一八六六）に設けたもので、幕府滅亡とともに廃止となったのを、明治政府が再興したものである。ブラウンが招かれた当時は、英学中心に教授することになったときであり、ブラウン招聘と時を同じくして、約二十名が入学し、合計三十名の生徒が、全国各地から集まっていた。ここで、ブラウンに学んだ青年のうちに、佐藤昌介・都築馨六・小野梓・浅野広輔・白石直治・井深梶之助・宮部金吾・真木重遠らがいたのである。ブラウンの教育は、やがて信仰の指導にまで、ひろがっていった。

ブラウンが一八七三（明治六）年八月、修文館との契約が満期になり同校を辞したとき、生徒のなかには、同校をやめて、ブラウンのもとで英学を修めようとする者があった。ブラウンは、ついに彼らの願いをいれて、私塾を開くことにした。これがブラウン塾で、横浜山手二百十一番で開かれた。同年秋のことである。

ブラウン塾に入る頃の井深梶之助
『井深梶之助とその時代』から

この塾には、これらの生徒のほかに、熱烈な伝道者であるジェイムズ・バラのもとで聖書をも学んでいた青年たちが加わってきた。押川方義・熊野雄七・植村正久・藤生金六・吉田信好らである。これによって、ブラウン塾は、伝道者養成のための神学塾へと変わっていった。このようになったのは、同年二月二十四日（二月十九日説もある）、キリシタン禁制の制札が撤去されたからであり、日本基督公会は、すでに禁制下の明治五年二月二日（一

©神奈川県立公文書館

八七二年三月十日）横浜居留地において創立されていたからである。

バラ塾と日本基督公会　ジェイムズ・バラは、文久元年（一八六一）に来日した米国・オランダ改革派教会派遣の宣教師で、ジョン・バラの兄である。ジョンは平信徒で横浜の高島学校の英語教師として来日した。

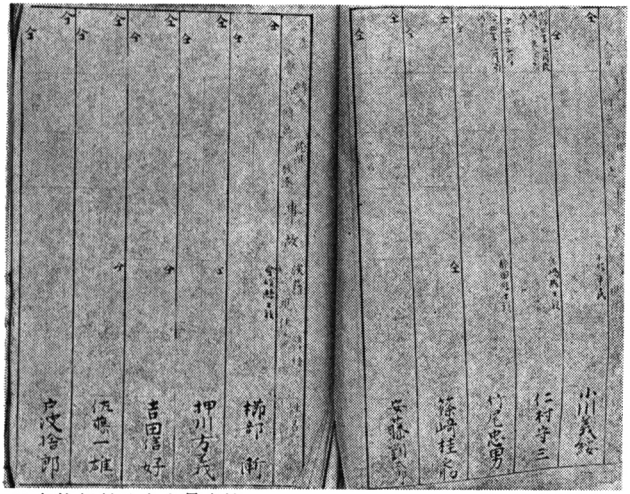
ジェイムズは、慶応二年（一八六六）から、自宅に数名の日本人を集めて、礼拝とバイブル・クラスをはじめた。そして、明治四年（一八七一）には、横浜居留地一六七番地で、十数名の青年学生に英語を教授するかたわら、聖書を教えた。このバラのもとでそだてられた信者が、わが国最初のプロテスタント教会である日本基督公会（横浜公会）を組織することになる。小沢三郎『日本プロテスタント史研究』によれば、日本基督公会の創立以前に受洗した日本人は、二十名であるが、そのうち、長崎で受洗した者十名、横浜・神奈川で受洗した者六名で、その他は、外国かまたは不明となっている。

日本基督公会の第一回洗礼式は、明治五年二月二日（一八七二年三月十日）におこなわれ、九人の男子がJ・H・バラから洗礼をうけた。このとき、日本基督公会が成立したのである。一八七二年一月一日は、旧暦の明治四年十一月二十一日にあたる。この陽暦の正月に、横浜に居留していた外国人らが初週祈禱会（年の最初の週の礼拝）を開催した。それを見て、バラ学校の生徒たちは、篠崎桂之助が発起人になって、J・H・バラに依頼し、旧暦一月二日（土）から、初週祈禱会を開始した。その場所は、「横浜海岸百六拾七番館石造の小会堂」であった。出席者は、主としてバラ学校の生徒で、指導者はバラであった。この初週祈禱会は、日曜以外、毎日午後四時から開かれ、さらに長期連日祈禱会に転化し、熱心に続けられた。また一月中の日曜日には、日に三回集会があり、盛会であった。このような熱気のうちに、日本基督公会は創立された。

明治五年（一八七二）二月二日の午後三時からの馬太（また）伝講義が終わってから、J・H・バラの司式で、九名の洗礼式がおこなわれた。ついで、小川義綏が長老に選ばれ、長老の権を授ける按手礼式（手を人の頭の上において祝福を祈り聖霊の力の付与を祈る

©神奈川県立公文書館

こと）がおこなわれた。この九名の受洗者と、これより以前に受洗していた小川義綏・仁村守三の二名が参加した合計十一名で、日本人による日本最初のプロテスタント教会が、横浜居留地のバラ学校で創立されたのである。この教会の仮牧師は、米国・オランダ改革派教会宣教師J・H・バラ、長老は小川義綏であった。ところが、この十一名のうちに二名の諜者（ちょう）が混入していて、すべてが、政府側に通報されていたのである。その二名とは、仁村守三と安藤劉太郎なる人物であった。バラが仮牧師になったのは、当時、日本人で教職にある者がなかったからであるとされている。また、「教会」ではなく「公会」とされたことについては、欧米の教会の教派性から、日本の教会を解放しようとしたものであると考えられている。信仰箇条も、万国福音同盟会の九か条の「教理的基礎」と同じ内容で、きわめて簡潔なものを採用した。これは、バラを除いて、S・R・ブラウン、ヘボンら外国人宣教師が、中国に長いこと伝道した経験に基づき、超教派がよいと判断したと推測される点がある。また、日本人信徒のナショナリズムが多分にからんでいたのである。



日本基督教公会会員名簿　横浜海岸教会蔵

バプテスト派の伝道

バプテスト派の日本における伝道の最初は、万延元年（一八六〇）ジョナサン・ゴーブル夫妻が、米国自由バプテスト伝道協会の宣教師として来日し、横浜で伝道を始めたことにある。ゴーブルは、はじめ、将来の福音伝道の準備として日本のことを視察するためペリー艦隊の水夫として、旗艦サスケハンナ号に乗り組み浦賀に来

©神奈川県立公文書館